



私のキャリアパス ～ドクター取得からポスドク、企業研究所まで～

長森 英二



私のキャリアパスや実体験で感じてきたことを紹介することで、生物工学研究者の卵やヒヨコの方々が何らかの刺激や励ましを受け取ってくれることを願って筆を取ります。

名古屋大学での学位取得

名古屋大学の4年生になった私は、小林猛先生の研究室に配属された。担当教官の本多先生（当時助教授）のもとで「植物細胞の大量培養技術の開発」に関するテーマを頂いた。しばらくすると素早い研究進捗を身上とする小林先生と、植物細胞の遅い増殖速度の間には埋め難い時間軸のギャップがあることを理解できた。ほどなく進捗報告会で発表するネタに困り、速く増える微生物の培養や、実験の合間にも計画的に進捗を図れるバイオフィーマティクスのテーマにも取り組ませて頂くようになった。小林先生の期待に応えたいと必死に喘いでいるうちにドクターコースは終わった。ドクターコースの終盤には厳しいご指導を頂くことはほとんどなくなっていたので、いくらか自分も進歩していたのだと思う。小林研の5年間で身についたのは、新しい種を蒔き続ける習慣、さまざまなテーマを同時進行させ結果を出す自信、そして基本的なプレゼン技術である。いずれも今の私にとって貴重な財産である。

大阪大学でのポスドク生活

何とか無事に博士号を取得したあと、大阪大学の福井希一先生の研究室でポスドクをすることになった。ポストは公的プロジェクトで雇用される社会保険付きのもので、当時のポスドクとしては恵まれていたと思う。福井研究室に興味を持ったきっかけは、その公募のタイミングが職探しのタイミングと一致していたからだけではなく、当時自分には未知の分野であった分子生物学的な知識を身につけられそうだったこと、そして福井先生が農水省から阪大に赴任して数年だったにも関わらず大きなグラントをいくつも採択されていたことに驚きを感じたからである。

かくして周囲の慣れない関西弁に戸惑いながら主に取り組んだのは、染色体などのメガbpもの巨大なDNAを安定してデリバリーする新技術の開発であった。スタート時こそ苦しんだものの、一緒にテーマに取り組んだ学生さんが優秀だったことも手伝って、ある程度の巨大DNA分子デリバリーが1年程度で可能になった。実はこの間には自分でピペットマンを握ることはほとんどな

く、学生さん達がスムーズに研究に取り組めるよう研究室内外で調整役をしたり、グラントの成果報告書や新規申請書の作成を数多く経験させて頂いた。誤解のないように強調しておくが、前述の仕事は私にとって雑用ではなく、いずれもいつか自分が独立して研究するために必要なスキルだと考え、自らの意思で積極的に取り組んでいた。福井先生に熱心にご指導頂いたおかげで、企画立案のスキルはかなり向上したと思う。微細加工や応用物理の研究室との共同研究で身についた知識は、現在の研究業務でもベースとなっている。以上の記述だけでは、私のポスドク生活が順風満帆だったかのように誤解されそうなので、実際には、絶えず自分の将来の行く先について悩み、きわめて忙しいスケジュールを消化しつつ、胃薬を常用していたことを告白しておきたい。

豊田中央研究所に就職して

諸先生方のように忙しい研究生を送りながら、かつ教育にも力を発揮する気力を持つ自信を持てず、また地元に戻らなければならない事情もあり就職先を考えていたところ、実家から車で10分の豊田中研にお世話になることになった。企業研究所に入って感じていることは、すべての手続きがシステム化されていて理不尽な雑用がきわめて少ないことである。提案する研究テーマには入れ物の目的に合致したものが求められる、研究実施には明確な目標設定と納期を求められるといった特徴はあるものの、やる気がある人には思い切ってやれる環境が与えられる、そして何事も結果次第である、といった点は公平感がある。勤務時間が管理されているので、決められた勤務時間内で集中して研究に取り組むようになり、日々の生活パターンが人並になったおかげか、今は胃薬は不要である。

さて学生をドクターコースに導くためにはどうしたらいいか？というのが最初の問いかけでした。この問題を人材育成の観点から考えると“しっかりした動機付け”がまず不可欠でしょう。私の場合は、諸先輩や先生方に対する単なる“あこがれ”だけでドクターコースへの進学を決めていたと思います。若い先生方が生き生きと楽しそうに研究活動に打ち込む姿を学生に見せられると“ドクターコース進学への動機付け”としては非常に効果的だと思うのですが、そのためには今の大学には何が必要なのでしょうか。